

令和2年度（2020年度）文部科学省
「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（プロフェッショナル型）」
第3回コンソーシアム会議「ローカル・サークル」議事録

熊本県立天草拓心高等学校

- 1 主催 熊本県立天草拓心高等学校
- 2 日時 令和3年（2021年）1月25日（月）
午後3時30分から午後4時50分まで
- 3 場所 熊本県立天草拓心高等学校 会議室
- 4 出席者
 - (1) ローカル・サークル委員（13名）

| | | |
|---------------------------|-------|--------|
| (株) デンソー天草事業所 | 所長 | 益田 智 |
| イオン九州株式会社イオン天草店 | 販促担当 | 羽衣石 純夫 |
| (有) 岡村農園「HANDMADE」 | 代表 | 井上 政哉 |
| (株) 光延農園 | 代表取締役 | 光延 啓人 |
| 本校就農アドバイザー、倉田農園ニライカナイ 事業主 | | 倉田 政幸 |
| J A本渡五和営農経済部営農課 | 課長 | 吉本 和喜 |
| 天草畜産農業協同組合 | 課長 | 井上 美智信 |
| 熊本農業研究センター天草農業研究所 | 課長代理 | 東 貴彦 |
| 天草広域本部天草地域振興局農業普及・振興課 | 課長 | 木庭 正光 |
| 天草市役所経済部産業政策課 | 課長 | 植田 伸広 |
| 天草市起業創業・中小企業支援センター | センター長 | 内山 隆 |
| 天草ケーブルネットワーク株式会社 | 課長代理 | 吉村 彩花 |
| 熊本県教育庁県立学校教育局高校教育課 | 指導主事 | 小田原 健 |
 - (2) 熊本県教育委員会（1名）

| | | |
|--|------|-------|
| | 指導主事 | 小田原 健 |
|--|------|-------|
 - (3) 熊本県立天草拓心高等学校（3名）

| | | |
|--|------|-------|
| | 校長 | 中村 洋介 |
| | 教頭 | 泉 伸仁 |
| | 研究主査 | 藤井 隼人 |

5 議事等

(1) 議案

議案第1号 「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」成果報告

議案第2号 「2030年の地域像について」、「次年度への課題」

6 会議の概要

(1) 開会

泉教頭が開会を宣言した。

中村校長の挨拶

小田原指導主事の挨拶

(2) 議事

○議案第1号 「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」学習成果 泉教頭

コロナ禍でサービス業が軒並みストップする中で、第1次産業は大切ではないかと思いますがみなさんはどのようにお考えですか。

羽衣石委員

30年くらいで、天草の人口は半減している。その中で、町単位でとらえていくと中心地である本渡市内は人口があまり減っていない。本渡市以外の近隣の町では人口が減り高齢化している。高校卒業した後、地元で就職できなくて、天草から出てしまう。このペースで人口が減っていくとイオンも店の経営を維持できるのか難しい問題。1次産業だけでなく3次産業も含めて考えるのが大切である。若者が働ける環境を整えていくことが大切である。「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（プロフェッショナル型）」の事業では高校と企業、高校と農家、魚業との連携を強めていくべきだと思う。3年目の取組はそういう方向に向かって行くには2030年よりも近年のことを考えていくべきだ。

植田委員

国勢調査では5年間で7千人ほど天草の人口は減っていき高齢化が進んでいく。高齢者を若い世代がみる時代が近づいており、他の地域よりも天草は高齢化が進んでいる。ICTを使うなど発想を変えた取組を行なっていくべきだと思う。過去の10年をもとに天草はこの課題を高校生の発想力で乗り切れるのではないかと思う。

東委員代理

担い手が減っている。10年も経てば60代くらいの方が大幅に減ってくる。今のように農家が物を作るだけでは経営は無理になってくる。1つの独立した経営者的な人材に育てていくことで農業を維持できる観点で高校生を育てていくことが大切である。経営的な視点を併せ持つ教育が大切である。

木庭委員

新規就農者を育てる仕組みで農業普及・振興など農業に関心をもった高校生に後継者として産業をバトンタッチしていつてもらいたい。天草空港を有効利用して、天草に来て頂いた人にも農業をして頂く仕組みをとれないだろうか。また、後継者不足の解消がなかなか進んでいない。

泉教頭

後継者不足の課題の解決はなかなか進んでいないが、令和3年で本事業は完成年度、令和4年からは国の支援がなくなる。本校は学校だけの教育の取組では成り立たない。高校生を地域との支援を受けながらどのようにしたら本事業の取組が継続できるか、また、社会の求める人材育成ができるかの意見が聞きたい。

内山委員

学校という意味では今まで答えが合って問題を解いていく取組だった。これ

からは、課題を見つけて如何に取り組んでいくかという教育になっている。そういう意味では、天草は課題先進国で、天草で課題解決を実践していこうということを担って育った人が課題を見つけに来ることができる。これまで商品を作って消費していくことがビジネスだったが、これからは消費ではなく、ここで何が作れるかを考えることがビジネスとなっていくことが天草ではできる。まずは、バーチャル、デジタルでできる。だが、いずれは天草に来なくては行けない。これは天草の見せ所である。

吉村委員代理

貴校の取組のYouTubeで拝見した。こういう取組はいろんな方に見てもらえる機会が学校は少ない。学校からの発信も少ないため高校では地協の様な取組をやっても配信しないところが多い。SNSを使って外部に発信していくことが大切である。

泉教頭

ホームページの更新はしているが、メディアへの露出は少ない。

植田委員

高校生との学びという観点から発信させて頂くためには高校生起業塾で地域に残ってビジネスプランを学校と連携して、小・中・高で学んでもらって、天草の子供達を育てなければいけない。天草市としてこれまで高校との交流の窓口がなかったが、これからは「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（プロフェッショナル型）」をきっかけに天草拓心高校生と連携してやっていかなければならないと思っている。事業が終わった後もこれをきっかけに活動していかなければならない。

羽衣石委員

せっかく3年間本事業を行なってきたのに、2年目でコロナ禍で大変だったが、国予算がないという理由で事業を引き継がないのはもったいない。イオンとしても可能な限り協力していくので、今後も形は変わるかもしれないが継続的に本取組をやっているといかなければもったいない。今後も協力していく。

泉教頭

天草市が請け負っているSBP（ソーシャル ビジネス プロジェクト）も来年度まで予算が付く。しかし、今後は、まちづくり協議会の予算のバックアップがある。本事業も今後、協力してくださる民間の企業がどれくらいいるのかが不安がある。1学年140人以上の生徒の活動が行えるのかお知恵をいただきたい。

益田委員

デンソーと天草拓心高等学校は2年ほど前から協力して活動している。デンソーは天草拓心高校に協力して上手くやっている。デンソーは、バイオ燃料をいろいろ活用できないか研究をやって商品化できないか検討している。令和3年以降もデンソーは天草拓心高等学校と共同研究を続けたい。天草拓心高校に上手くコーディネートして活躍してくれる人が学校にいと事業が続けられる。企業から人やお金をとってくれる人がいと事業が成り立つのかと考えて

いる。

○議案第2号 「2030年の地域像について」、「次年度への課題」

藤井研究主査

本事業の立ち上げの目標の一つが起業家を作りたいということがあった。卒業生が天草外で学んで、天草に戻ってきて起業する教育を行なうことが目標で、実際この様なことをしている生徒もいる。外で修行して戻ってきて天草で農業をやりたいという生徒もいる。今回の研究を通して農業以外の分野と協力して新たなビジネスを作っていくことも目標の一つである。

Society 5.0時代がやってくる中で、新たな仕事が生まれてくる。地域に雇用が生まれるのか、また、生徒達がどう仕事をしていくのか心配である。

光延委員

2030年は明るい未来か暗い未来か、どちらかというとなら後者である。ヨーロッパではオランダは農業先進国で世界2位の農産物輸出国であるが、10年後生産関係者は10分の1程度に、算出額はほぼそのままである。生産性を高めること機械化することで売り上げを高める。アメリカもしかりで、作業はメキシコ人に依頼するなどほとんどアウトソーシングにする。中小企業不要論があって、企業を大企業に集約して、高い賃金で皆は働く。ヨーロッパ型の農業で働くには生産性をあげる機器などを導入してやっていく。もう一つは出先で、天草が弱いところはここである。天草は非常に競争力が弱い。大型農家、都市近隣農家は販売力が強い。天草の課題は機械化・輸送の面で課題を抱えているが。人材育成の面ではその中でもある意味方向性を決めていくと農業のプロフェッショナルや優秀な人材が育っていくとよい。もう少し、どのような人材を作りたいか企業のニーズをくみ取って協力して行って地域を活性化していったら、天草の雇用問題も解決に貢献できる。

内山委員

天草に来ると楽しい物が作れるよという楽しさがあるとよい。

(3) 閉会

泉教頭が閉会を宣言した。

令和2年度（2020年度）文部科学省
「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（プロフェッショナル型）」
第1回コンソーシアム会議「マザー・サークル」議事録

熊本県立天草拓心高等学校

- 1 主催 熊本県立天草拓心高等学校
- 2 日時 令和2年（2020年）9月11日（金）
午前10時30分から正午まで
- 3 場所 熊本県立天草拓心高等学校 校長室
- 4 出席者
 - (1) マザー・サークル委員（3名）

| | | |
|------------------|-----|--------|
| 熊本県立農業大学校 | 校長 | 中村 秀朗 |
| 熊本県天草広域本部 | 本部長 | 古森 美津代 |
| 熊本県教育庁教育指導局高校教育課 | 課長 | 岩本 修一 |
 - (2) 熊本県教育委員会（3名）

| | | |
|--|------|-------|
| | 課長 | 岩本 修一 |
| | 審議員 | 松坂 秀男 |
| | 指導主事 | 小田原 健 |
 - (3) 熊本県立天草拓心高等学校（3名）

| | | |
|--|------|-------|
| | 校長 | 中村 洋介 |
| | 教頭 | 泉 伸仁 |
| | 研究主査 | 藤井 隼人 |
- 5 議事等
 - (1) 議案

| | |
|-------|--|
| 議案第1号 | 「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」会長選出 |
| 議案第2号 | 令和2年度文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」における本校の取組について |
- 6 会議の概要
 - (1) 開会

泉教頭が開会を宣言した。
中村校長の挨拶
岩本課長の挨拶
 - (2) 議事
 - 議案第1号 「地域との協働による高等学校教育改革推進事業の会長選出」
コンソーシアム委員設置要項第3条に従い、マザーサークル、ローカルサークル委員より承認を得て、中村校長に決定した。
 - 議事案2号 令和2年度「地域との協働による高等学校教育改革推進事業説明」
藤井研究主査
昨年は生徒の学びの土台の構築を図るため基礎学習に取り組んできた。昨年、

コンソーシアム委員から指摘があった、計画性や目標設定、地域の協働体制について、本年度は、課題解決型学習を中心として地域と協働しながら進めていくことに重点をおいている。また、指摘事項にもあった、計画性や目標設定等に関する改善点については、プロジェクト学習計画に沿って学習を進めていく。更に、今後の学習の中では様々な人材と繋がり、コンソーシアムを介して新たな人材や機関と繋がっていくことができる計画をしている。次回の会議では生徒の変容をとらえるために数値化した評価の現状をお知らせしたいと考えている。本日は課題研究型学習プロジェクト学習の一環としてローカル委員の方々とディスカッションを進める予定。内容としまして計画の中身や目標設定、協働学習の内容を踏まえ委員の方々からご指導・ご助言を頂きながら今後の計画を含めて本日お話しをして頂く予定である。事業説明を終わる。

質疑応答

古森委員

昨年から見ている側からすると今回は非常にわかりやすかった。昨年は、よく理解できないことが多くあったが、今回は事前にいただいた資料を見ていて何を目指して、何をするのか非常に理解ができた。今年の研究の方向性がはっきりと見えてきた。

岩本課長

説明の中で生徒の変容、ルーブリック評価のところで昨年度分のアンケート評価を見せていただいたが、1・2・3・4のアベレージの推移で1学期、2学期、3学期という風に統計を取っていたと思うが、アベレージだけで生徒の変容が図れるのか。2.1が2.3になったとして何が言えるのか。加えて、例えば4の生徒がこの研究活動を始める前は少なかったが、2・3学期の活動を通して度数が増えているのか、逆に言うと1の生徒が減ってきている。そう言うような視点で評価をされると非常にわかりやすいのではないかと。アベレージだけだと2.1と2.3はどっちがいいのかを言われて一般的には高い方が良いと言われるが、例えば2.3であっても2.1と比べて実は1の生徒が増えているなど両極端に別れている状況という可能性もあると思っている。だから、いろいろな視点で分析されることによって活動の中でどういう視点、要素を織り込むことが生徒にとって効果的なのかが見えてくるのではないかと。今年度のアンケート評価をすでに始めているのかわかりませんが、する際は集計の時に1・2・3・4の推移を見ると別の視点で見ると昨年度の資料を見て思った。

藤井研究主査

評価に関して、昨年夏に同じようなご指摘をいただき、やはり個人の細かい変容が大切と考えた。アベレージではなく、0が2になった子もいれば2が3になった子もいて、個人の変容が非常に大事になってくると捉えているので、今ご指導いただいたとおり今後の評価のあり方については再度確認をさせていただければと思う。

岩本課長

数学では新しい統計の概念で「箱ひげ図」というものを生徒達は学んでいる。一般的には出ていないが、いろいろなものを生徒が分析する場面があるとすれば、今の評価の中で学んでいるものを活かしながらしていけると今後良いものができると思う。

泉教頭

ルーブリックで何ができるようになったのか、アウトプットの部分で評価していこうと今やっているところである。

中村委員

プロジェクトの活動指標で生徒の変容と言うことばかりを言っているが、それにはなにか尺度かなにかを設けてやっていかれるのか。

藤井研究主査

プロジェクト活動の中で地域の人材の方々を関わる事で生徒がどう変わったか、探求的な学習、謎を解決するといえますか、そういったところに生徒の成長の変容を見たいという中で、数値的な具体的指標には示していない。各グループに設定させていただいて活動指標の最終的な結果は示させていただきたい。

中村委員

研究期間3年間ですけど最初の年の1年生が3年間関わっていくのか。

藤井研究主査

昨年度始まりまして、令和元年度入学生が対象となっていて、本年度は2年生、1年生を対象に進めている。

(3) 閉会

泉教頭が閉会を宣言した。

令和2年度（2020年度）文部科学省
「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（プロフェッショナル型）」
第2回コンソーシアム会議「マザー・サークル」議事録

熊本県立天草拓心高等学校

- 1 主催 熊本県立天草拓心高等学校
- 2 日時 令和3年（2021年）1月26日（金）
午前10時30分から正午まで
- 3 場所 熊本県立天草拓心高等学校 校長室
- 4 出席者
 - (1) マザー・サークル委員（4名）

| | | |
|-----------------------|-----|--------|
| (株)デンソー社会ソリューション事業推進部 | 部長 | 渥美 欣也 |
| 熊本県立農業大学校 | 校長 | 中村 秀朗 |
| 熊本県天草広域本部 | 本部長 | 古森 美津代 |
| 熊本県教育庁県立学校教育局高校教育課 | 課長 | 岩本 修一 |
 - (2) 熊本県教育委員会（2名）

| | | |
|--|------|-------|
| | 課長 | 岩本 修一 |
| | 指導主事 | 小田原 健 |
 - (3) 熊本県立天草拓心高等学校（3名）

| | | |
|--|------|-------|
| | 校長 | 中村 洋介 |
| | 副校長 | 田畑 淳一 |
| | 教頭 | 泉 伸仁 |
| | 研究主査 | 藤井 隼人 |
- 5 議事等
 - (1) 議案
 - 議案第1号 「令和2年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業」成果報告
 - 議案第2号 「2030年の地域像について・次年度へ向けての課題」
- 6 会議の概要
 - (1) 開会

泉教頭が開会を宣言した。
中村校長の挨拶
岩本課長の挨拶
 - (2) 議事
 - 議案第1号 「令和2年度地域との協働による高等学校教育改革推進事業」成果報告

古森委員

何かの事業をするだけでなく、それを踏まえて成果や課題をしっかりと見据え、地域に還元していくストーリーが、どのプロジェクトにおいても見えた

ころが素晴らしいと感じた。その視点を大事にしていきたい。

岩本課長

原稿をそのまま読んでいるところが気になった。2年目3年目とステップアップしていく上で、内容を理解して、スライドを見ながら自分の言葉で説明できるようになって欲しい。大学や社会に出てもプレゼン力は必要であり、また、グローバル化が進む社会においては英語力も求められてくるので、そういう力も身に付けられるような指導があればよいと思う。

渥美委員

朝日新聞がSDGsの特集に、デンソーと天草拓心高校の協働活動を取り上げたことは嬉しく思った。ただし、生徒の発表を聞いたところ他の高校生と比べると物足りない。他校では原稿を見ず、要約書もプレゼン資料も英語で書く生徒がいた。

天草拓心高校も2年目3年目と続けて発表の場を設けて練習していけば、発表にも自信がつくと思うので、そういうところを自由に、活発にやらせるような取組を期待したい。発表の中で「成功の鍵」という言葉を使っていた。弊社でもいつも目標達成のためにキーサクセスファクターというものを設けて、成功するためには何が必要で、それが現在どこまで達成できているかを報告している。周りの大人達の見解も取り入れた発表も非常に有効だと思うので、これからも続けて欲しい。

中村委員

地域資源を非常に良く捉えて有効活用するという取組が見られた。できれば地域の方々と商品化まで繋がるような取組ができればと思う。商品化に向けてネーミングも面白いものをつけて、是非、天草の魅力アップに繋げて欲しい。

藤井研究主査

生徒達がYouTubeで発表するのは2回目で、やはりカメラを向けられると緊張する生徒たちの姿が見られた。次回からは生徒たちが自分の取組やその思いをプレゼンできるように持っていきたい。

別紙資料1に今年度の成果報告を記載している。まず、校外での協働学習は目標回数20回を達成する見込みである。また本年度YouTubeの活用を3回予定している。2月にも他校向けに生徒の学習発表等を行う予定なので、それも含めて外部評価を取りたい。また、授業の充実化を図るために各学期1回、教員の授業改善等に向けた研修を行った。

次にコンソーシアムの機能的な運用としては、コンソーシアムの委員の方々と関わらせていただいた回数を含めた数値を載せている。特に天拓プロジェクトでの連携、支援等をいただいた数は非常に多く、常日頃から学校に足を運んでご支援いただいたという経緯がある。2番のコンソーシアム委員による評価は前回までの会議までの結果となっている。研究の内容については4段階による評価を行った。全て3.0を超える高評価を得ることができたが、「将来、育てたい地域像が具体的ではない」、「もっと細かな目標を立てた方が良い」というような意見もいただいたので、また再構築していきたいと考える。

本事業についてのコーディネーターの機能について非常に大きな役割を担っていたという評価を得た。次に3番、天拓プロジェクトの成果として、委員以外にも連携をした地域の方々を中心に評価をしていただいた。今回、コロナ禍で活動に制限がかかる中で生徒が考える場面があり、困難に遭った時のシュミレーションとして生かすことにつながった。4番、研究成果報告として、定性的成果に対する評価を2学年を対象に実施した。この中で、目標に達しなかったものは「地域と県内外の取組を結びつけて考えるようになった」であった。また「島外に発信するための天草の歴史、文化、企業、取組等への関心が深まった」に至っては、子供たちの関心が「自分で意識をしている」と答えた生徒は67%にとどまった。次に5番目の生徒の変容として、特に気になったところを3領域に分けて示している。思考力を伸ばしていくためにはどのような授業をすれば良いのか、それを考える良いきっかけとなった。2番の主体性の結果では、生徒たちが自ら進んで学んだという自覚を基に評価をしている。リーダーシップ、目標設定能力、計画性、持続性がこちらの小分類とした領域で意識調査をした。特に「自ら学習過程において計画の見直しや改善ができる」といった自己管理のところが非常に意識が低かった。

渥美委員

生徒が積極性を発現したり、協調性が上がったりする一つの要因として、その地域の方との取組があると思うが、実際に地域の方やローカル・サークルの方々とのような取組をされてきたのか。

藤井研究主査

リモートでの商品開発の方向性を一緒に共有する場面や技術指導をしてもらう活動があったり、近所の農家に一緒に出かけていき、技術指導等で研究内容に対する助言等を頂いた。多くの方々が学校に来校し、生徒たちとディスカッションを行ったこともあった。

渥美委員

生徒は自発的に先生と相談しながら取り組まれたか。こういうことを聞きに行きたいとかそういった自らの発言もできるようになっていたのか。

藤井研究主査

最近では生徒たちの発案で、自分で電話連絡をして会いに行ったりした。

3番の資料「高校魅力化評価システム」に関しては、三菱UFJファイナンス等が中心になり、全国の高校生を対象に評価アンケートが実施された。

主体性に関わる学習活動で2年生の結果は「実質的に調べものや取材を行うこと」について55.9%、「学校外の色々な人に話を聞きに行く」に関して39.7%、昨年度に比べたら11ポイント以上上昇している。「協働性」に関して全体の70%以上は、学年の数値として自覚を持っているという結果になっている。ただ周囲の大人とその「学習活動について話し合う機会があるか」ということに関しては60%にとどまっている。「社会性に関する学習活動」に関しては、やはり「日本や世界の課題の解決方法について考える」について30%ということで、広い視野、グローバルな視野でまだ課題を捉えきれてない

ところが現状である。

「学習環境」について気になるのが、「主体性に関わる学習環境」の中で「自分が何かに挑戦しようと思った時に周りは手を差し伸べてくれる」というのに対し、生徒と大人の差は12.4%の開きがある。「協働性」に関して「立場や役割を超えて協働する機会がある」に対して、こちらも12.5%と非常に大きな開きがある。「探求性」に関しては、「本音を気兼ねなく発言できる雰囲気がある」はプラスの評価である。こちらは大人より生徒が評価しているように受け取れる。「社会性に関する学習環境」においては、「自分のクラス・地域を外からの視点で考える機会がある」に関して20.5ポイントの開きがある。つまり自分の住んでる地域を客観的に見ることが、生徒たちにとって少し苦手だと捉えている。

主体性にかかわる自己認識の「私は自分自身に満足している」について、26.5ポイントで自分自身に満足していると答えた生徒は低かった。それから社会性に関する自己認識「将来の国や地域の担い手として積極的に政策決定に関わりたい」の質問に関して、22.1ポイントだった。「私に関わることで社会状況が変えられるかもしれない」に対しては23.5ポイントという結果だった。「政策決定に関わりたいというのはどういうことですか」の質問が非常に多かった。

生徒の行動実績の中で「授業で興味・関心を持った内容について自主的に調べものを行った」に関して32.4%、また「探究性に関わる行動」で「授業でなぜそうなるのかと疑問を持って考えたり調べたりした」に関して32.4ポイントと、非常に低いと判断をしたところである。全体的に他校との差が前項に出てきており、参考の指標になると考えている。総合的な生徒の満足としては、この学校に入って良かったと思う生徒が80.9%となり、前年度より6.26%上昇した。こちらのアンケート結果については、次年度に向けて強化しなければならないところである。

先日、ローカル・サークルの会議で「2030年の地域像について」というテーマで参加者と情報交換を行った。テーマが大きかったため「天草にとってどうなっていればいいのか」という観点で話し合った。本渡周辺の地域の過疎化が進む中で第1次産業だけでなく、第2次産業も頑張らなければならない。もっと直近の未来を考えて10年先ではなく3年4年5年先を見据えて企業や農家との連携を密にしていく必要があるのではないか、という意見があった。

「農業後継者の会」を発足し、天草広域本部では5年間で新規就農者を育てる政策を実施されている。学校でも、興味・関心がある生徒に対して、政策を紹介して農家と繋がりながら、地域への定着等も勧めていってはどうかというご意見もあった。

農家の委員からは、農家は土地を大切にしているが、やる気のある就農者には譲っても良いと言っている農家もいるため、そのような制度を行政機関で整備をしてほしい、との意見もあった。

その他、海外でも農業生産人口は減っている国がある中で、日本が進むべき方向性を見定め、必要な担い手を育成するための目標を立てる必要がある、などに意見も出た。

令和5年度以降の地域との協働体制をどのように継続していくか、というテーマに関しましては、これからは課題を見つけて、主体的な学びを実践していく時代である、という意見を頂いた。企業や農家と連携し、相乗効果のある関係が望ましい、学びのノウハウを企業に取り込んだり、企業も学びの中に入っていたりした方が良い、というような意見も頂いた。

最後にオンラインで様々な地域の人材と繋がるのも良いというので、天草以外の高校生と繋がって、お互いの地域については情報交換をする。また、それが自分の地域を再発見するのに繋がるのではないかと、というような助言を頂いた。

○議案第2号 「2030年の地域像について・次年度へ向けての課題」

古森委員

2030年の地域像は誰にとっても分からないことであり、設定するのはとても難しい。ただ、一つ変わらないことは天草で学んでいる子供達は、天草に残っても、天草の外に出ても、天草の子供である、ということだ。天草の外にいたとしても、天草との関わり保ち、天草に協力してくれる子供達を育てていくことが大切である。

コロナ禍によって、通信手段が急速に発達したことで、人との関わり方は大きく変化した。都会のデメリットや地方のメリットも再発見できた。そのため、2030年の天草にとって、今の高校生が、天草とどのように関わっていくことができるのか、そういう視点を持った教育を実践していくことが大事ではないかと感じた。

天草広域本部としては、新規就農の促進に向けた施策を継続して取り組むが、それを越えた視点で天草の子供たちをどのように地域で協働しながら育てていくか、という視点が大切である。

中村委員

現在、県立農大と農業高校とをクラウド上で繋げ、シクラメンを題材としたところで、お互いの生育状況や実際の現場の状況をタブレットやスマートフォンで見られるような環境を構築している。今後も農業高校と連携して、地域との繋がりながら、新たな第1次産業のあり方を生徒と共に構築していきたい。

渥美委員

実業高校の特徴は、企業との結びつきで、より先進的な学びが損得なしに実践できること、それがメリットだと感じた。

これまでは世界規模でエネルギー問題が懸念されてきたが、今後は食糧問題に移っていくと考えている。そういう意味では、天草拓心高校のように農業や水産などあらゆる学科が存在している高校の担うべき役割は大きい。ぜひ、天草拓心高校が天草の魅力を広く発信して欲しい。天草は高齢化社会や過疎化が進むかもしれない。しかし、自然豊かな天草でワーケーションを促進し

ていける可能性も秘めている。

岩本課長

今回の指定校事業をうけて天草拓心高校の生徒には自分の良さに気づいてもらいたい。先生方に一人一人の生徒の良さを引き出していただきたい。また、これらの学びを通して、天草の良さをさらに知っていくことが大切だと思っている。これからは、スマート農業など新しい農業のあり方を模索していかなければならない。交通の便が良くなる事で、天草地域の農業にとってのメリットとデメリットは何なのか、など様々な視点で今回の研究内容を生徒一人一人が分析して行ってほしい。たとえ天草外の地域で生活をしたとしても、天草の良さを語れる大人になってほしい。

(3) 閉会

泉教頭が閉会を宣言した。

令和2年度（2020年度）文部科学省
「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（プロフェッショナル型）」
第1回「運営指導委員会」議事録（概要）

熊本県立天草拓心高等学校

- 1 主催 熊本県教育委員会（管理機関）
- 2 日時 令和2年（2020年）9月11日（金）
午後1時30分から午後3時30分まで
- 3 場所 熊本県立天草拓心高等学校 視聴覚室
- 4 出席者
 - (1) 運営指導委員（5名）

| | | |
|------------|---------|--------|
| 有限会社木之内農園 | 取締役会長 | 木之内 均 |
| 国立大学法人熊本大学 | 准教授 | 高崎 文子 |
| 株式会社ココファーム | 品質管理部門長 | 津留崎 恵美 |
| 株式会社農テラス | 代表取締役 | 山下 弘幸 |
| 株式会社吉次園 | 代表取締役 | 前田 正明 |
 - (2) 熊本県教育委員会（2名）

| | | |
|--|------|-------|
| | 審議員 | 松坂 秀男 |
| | 指導主事 | 小田原 健 |
 - (3) 熊本県立天草拓心高等学校（6名）

| | | |
|--|--------|-------|
| | 校長 | 中村 洋介 |
| | 教頭 | 泉 伸仁 |
| | 研究担当者他 | |
- 5 議事等
 - (1) 議案

| | |
|-------|--|
| 議案第1号 | 運営指導委員会会長及び副会長の選出について |
| 議案第2号 | 令和2年度文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」における本校の取組について |
| 議案第3号 | 昨年度の取組を踏まえた今年度の取組及びコロナ禍で研究活動を進めていく解決策について |
- 6 会議の概要
 - (1) 委嘱状交付
熊本県教育委員会より交付
 - (2) 開会
小田原指導主事が開会を宣言
管理機関として松坂審議員挨拶
指定校として中村校長挨拶
 - (3) 議事
○議案第1号 「運営指導委員会会長及び副会長の選出について」

運営指導委員会設置要項第3条の2項に従い、管理機関より木之内委員を指名し、了承された。

木之内会長より高崎委員を副会長として指名し、了承された。

○学習事例発表

学習事例発表①：(生物生産科 テーマ「デンソーの持つココミクサK」を使用して、地域課題を解決するための研究)

質疑応答 (運営指導委員より)

高崎委員

ブタの臭気計測の頻度を教えてほしい。計測はいつ行う予定なのか教えてほしい。

生徒

月に1、2回ほど大江の養豚農家を訪問して臭気計測を行っていきたいと考えている。

木之内会長

ココミクサKの配合割合の違いによる変化を検査するか教えてほしい。

生徒

現状は、配合割合を変えずに検査を行っていく予定です。

学習事例発表②：(食品科学科 テーマ「晩柑を利用した加工品を開発し、資源の有効活用と地域活性化を目指した研究」)

質疑応答 (運営指導委員より)

前田委員

発表で加工品の開発について紹介したが、それは皆さんが作りたいものを作っているのか、世の中のニーズがあるものを作っているのか、もしくはニーズがあるようなものを作っているのであれば、どのように決めたのか、その検討した過程を教えてほしい。

生徒

一回目の試作で、クッキーの中に晩柑ジャムを入れるジュレを作ったが、その際に煮詰めすぎによるジャムの硬化や、ジャムの水分によるクッキーの軟化が発生し、最終的には晩柑の風味も活かすことができなかった。そのため、ドーナッツなどのスポンジ生地にするると晩柑の風味が感じやすいのではないかと考えドーナッツにした。

木之内会長

今年、即売会をやってみたいということだが、できた商品をいくらくらいで売りたいと思っているのか。

生徒

私たちは10代～20代の若い年齢の方に向けて商品を開発しているので、カフェのような所で、手ごろな価格で買えるようにしたいと考えている。

津留崎委員

こういった年齢層で、こういった方をターゲットにしているのか。

生徒

10代～20代の若い年齢の方に向けて商品を開発して販売したいと考えている。

学習事例発表③：(生活科学科 テーマ「天草の魅力あるオリジナル石けんを作り、新商品を開発するための研究」)

質疑応答 (運営指導委員より)

山下委員

どの世代の人に使ってほしいのかを聞かせてほしい。また、ターゲットは男性なのか女性なのか。

生徒

肌に優しくて、誰でも使いたいと思えるようなデザインになっている。天草は、若い人たちが減ってきていると思うので、若い人たちを引きつけるような商品を作っていきたい。

生徒

見た目や香り、デザインを重視した石けんなので、プレゼントなどの贈り物などに使ってほしい。

生徒

老人ホームや保育園・学校など、人がたくさんいる場所でもきれいに洗える石けんと、ギフトなどのお土産や結婚記念日で贈り物として利用できるような商品にしたい。

山下委員

コンセプトを考えるときに、みんなで統一したイメージを持って作るともっと良い商品ができると思いますのでぜひ頑張ってください。

前田委員

目的のところに塩が出てきていたが、それが強みになれば良いと思ったので、塩についてどのように考えているか。

生徒

天草は、塩も有名なので、天草をPRするために塩も混ぜた石けんなど、花などと合わせていろんな石けんを作りたい。

高崎委員

天草のオリジナルの魅力が発信できるとしたらどんな植物なのか、これが入っていると天草という花があるのか聞かせてほしい。

生徒

私たちはハマボウを入れたいと考えている。スライドで説明した花は全て天草・上天草で作られている花なので、季節によって咲く花も違うので、それによって色々な花を入れていきたい。

○議案第2号 「令和2年度文部科学省【地域との協働による高等学校教育改革

推進事業】における本校の取組について」

これより木之内会長へ進行を移す。

木之内会長

事業の概要について天草拓心高校担当者へ説明を求める。

藤井研究主査

事業の全体説明に関しては、「別紙資料Ⅰ」に沿って進める

「別紙資料Ⅰ－1」事業の概要について、昨年度と同じものを記載している。

2番に、今年度実施する研究開発のポイントは、昨年度、委員の方々から指摘、助言等を受けた内容を盛り込んでいる。

今年度は生徒たちが学校という小さな社会にとどまらず、外に出て自らアウトプットできる学習プログラムを進めていきたい。また、地域または天草管外に生徒たちが自ら出て行くことによって、現場で見られる感性や発見、感動等を通して社会性を身に付けていく工夫をしている。具体的には、生徒たち全員に名刺やプレゼンの機会などを設けている。その他、職業観を育成するためには、実際に現場で実習をさせ、その場でこういった仕事が行なわれているか、またはどのような課題があるのかを身をもって体験する機会を設けている。

3番に、昨年度からの改善点として、アウトプットする能力を育成するために、今年度プロジェクト学習を進める中で、定例の合評会を校内で行う予定にしている。3ヶ月に一回のペースで行い、年に4回の開催を予定している。その中で、研究計画または生徒の学習の過程等を教職員または生徒と一緒に協議をしながら改善ができればと考えている。また、今年度コーディネーターとして昨年度と同様、西嶋氏に協力いただいている。指導・助言により、ビジネスの手法を使って研究活動を進めることを我々教職員、または生徒も大変勉強になっている。生徒の学習発表の中にあっただが、マーケティングの手法を使ってターゲットを絞り、そこに向けた商品開発を行っている班が数多くある。

昨年度の反省でもあった観点別の評価については、現在、ルーブリック評価を作成し、目標に準じて生徒たちに学習を進めさせている。昨年度はアンケート調査がほとんどであったが、今年はポートフォリオによる目標設定を付加し調査を行っている。まだ評価システムの開発には時間がかかるので、今後委員の方々にもご相談をしながら、より良い生徒の変容が捉えられるような評価法を開発していきたい。

コンソーシアムの機能的な運用として、本日の午前中にローカルサークル委員と生徒たちのディスカッションの場を設けた。研究項目別、令和2年度計画と3ヶ年計画を別紙A3版の資料に示している。ここでは、生徒たちが年間を通して目標に対してどう動いていくのかを委員に示し、意見や指導を受けることができた。中には大変分かりやすいという意見や自分がどう関わっていけばよいのか、どういう人材が必要なのかなどの意見が出された。課題としては、本日のように全員が介するのではなく、随時、委員の方と繋がって意見交換やディスカッションができる場を多く設けていきたい。また、事業運営の困難な点として、コロナウイルス感染防止の観点から、生徒が様々な場所に出かけて

学習する機会を失っているような現状である。今年度予定されていた農業関連視察研修や現場実習を中止せざるを得ない状況になっている。今後の課題として、Y o u T u b e等を使って生徒の学習風景や成果、今後天草をどうしていきたいかなどの思いを世界中に発信できればと考えている。また、より主体的な学習活動を促すために、どのような工夫が必要なのか、また、S o c i e t y 5 . 0の社会で生かせるソーシャルスキルを、どのようなものを取得させればよいのかなども理解を深めていきたい。

質疑応答（運営指導委員より）

前田委員

将来、生徒には天草で起業家になってもらいたい。そのために簡単なビジネスプランを立ててもらいたい。

藤井研究主査

将来的に、天草で農業に限らず農業の生産物を使って色々な分野で起業してほしいという願いから、このような活動をしているが、実際は我々教職員が起業するという機会に触れたことがない。しかし我々がそのような感覚を持たないといけないので、今年コーディネーターを依頼している西嶋氏のアドバイスで、起業家になるためのステップ学習をプロセスの中に入れ研究開発を進めている。

山下委員

Y o u T u b e等で情報発信しようと思ったが、非常に良いと思う。生徒がプロジェクトをこの場で発表するのも良いが、生徒たちの興味・関心にSNSがプラスに転じると良いと思う。別件で大阪の農業高校に講義に行ったときに、そこでは学科のプロジェクト毎にフェイスブックページを作って情報発信していた。そうすることで校内以外の民間の方からのコメントもいただくことができ、周りを巻き込んだ活動ができていた。

高崎委員

評価のところで質問するが、研究計画の最終的な目標のところには各プロジェクトの目標が設定されていますが、この目標は何のためにこのプロジェクトをやるのかについてのものだと思う。それも重要であるが、計画に基づいて行うだけではなく、それを行うことでどのような力が身に付いたというところがあると良いと思う。それがあると、そこに基づいて評価ができるのではないかと思う。実際に授業されている方の話を聞くと、経験しないとこれで何を身に付けると授業が成功するのかを設定するのがすごく難しいだろうと思う。そこをルーブリックなどで作っているのが今の課題だと考えられる。今できていないからというのではなく、3年かけて作られるといいと思う。

藤井研究主査

指摘があったところは我々も試行錯誤しながらやっている。何を目指して、何をやって、何ができるようになったかというのを、どう数値化しようかとルーブリック評価を工夫しながら開発中である。

木之内会長

このプロジェクトを通して生徒がやっていて楽しかったとか、一般の社会の人とこんなに話せるんだという自覚を確実に持ってもらいたい。高校生に合わせた形での設定を考えていく必要があると思う。先生方が一緒にプロジェクトをやって、自分たちも発見し、自分たちも楽しかったと思ってもらえるようにしてほしい。

藤井研究主査

運営指導委員会は年間2回を計画しているが、昨年度は中間報告ができなかったのも、今後は生徒の動きや困っていることなどを逐一報告していきたい。次回は1月に計画しているが、その際には、中間報告で生徒がどのような状態なのか、ある程度理解した上で再度この会を設けさせていただきたい。

木之内会長

確かに最初と最後の会議だけでは中間が分からないと感じていた。是非、そうしていただきたい。

○議案第3号 「昨年度の取組を踏まえた今年度の取組及びコロナ禍で研究活動を進めていく解決策について」

木之内会長

今年度、実質的な部分でコロナの状況で研究活動を続けていく上で委員の皆様から工夫したら良いというところなどの助言についてお願いしたい。先生方としてもコロナ禍で色々とやりにくいところがあったと思う。その点を先生方からご意見はないか。

谷口（生物生産科）

コロナ禍で活動ができなくなった研究班もあり、生徒と協議した結果、野菜に特化した研究活動としてドライベジタブルの研究に切り替えた。本校でもトマト等の野菜を生徒たちが作っているが、収穫・調整する中で、必ず規格外の物や食品ロスに繋がるものが出てきている。そういったものを有効活用し、天草の生産者の方々の取組にも繋げていきたい。

稲田（食品科学科）

現在、2年生が実習しているが、密になるのを避けるために、今まで1つの加工室でやっていた生徒を分散して実習することでなんとか対応をしている。また、先ほど前田委員からの質問への回答として、スタートは自分たちのやりたい、作ってみたいものにチャレンジさせている。生徒たちは自分たちで考えてやってみて、工夫しながら実習を行い、本人たちなりに手ごたえを感じながら実習に取り組んでいる。

福島（生活科学科）

令和2年度の研究活動資料2枚目に記載された8班から11班までの4班で研究を進めている。8班は、昨年から石鹼というテーマでしたが、コロナ禍の現在、求められている石鹼は何かということで、生徒たちなりに考えて研究が進んでいる。企業等の視察等に行く予定であったが、コロナ禍で実現できていない状況である。その他、生花の需要拡大についての研究では、午前中のコ

ンソーシアム委員とのディスカッションで、本校の花を地域にどうアピールするかなどの助言をもらった。

藤井研究主査

事業全体としては、農家に出向いて実施する現場実習を計画していたが出来ない状況にある。農業関連企業等の視察研修もストップしている状況で、生徒たちに現場というものをどのように教えるのか、また、その中で職業観をどのように身に付けていくのか、そういうところが、現在、非常に困っている。冒頭の挨拶で、ピンチはチャンスという言葉があったが、このような状況の中で地域で困っている方が非常に多いのではないかとということが1つ挙げられる。そういうところに高校生と一緒に地域を盛り上げていくことが出来ればと考えている。

木之内会長

それぞれコロナの影響が少なからずあると思うが、委員から、自分の考えやご経験も含めて何かアドバイス等ありましたらお願いしたい。

前田委員

私自身は地元の中学校を出て、航空自衛隊に入り経営の勉強をし、帰ってきて現在は農業をしている。農業高校や農業大学校もしくは大学の農学部の実態はあまり知らない。推察だが、技術というのは生産技術や食品加工の技術などあるが、経営管理の技術があまり教えられてないのではないかと考えている。農業関係の方と話してみると、認識も浅いし話が通じないのでそれが業界の大きな課題の1つではないかと考えている。農業高校もどこまで教えるのかというのはあるが、やはり農業といえども商売である。いいものを作ったらそれなりの価値で売らなければ続けていけない厳しい側面もあるので、そういう面も併せて教えていただきたい。プロジェクトを進めるときも経営面もしっかり教えて、そういう人間を育てていただきたい。

木之内会長

前田委員の発言のとおりで、どうしても学校の世界というのは、あまり金勘定するなという傾向があると教育委員になってから感じている。どうしても限られた予算の中でやっているのだから、自分たちで稼ぐという感覚は高校だけの問題ではなく、学校教育全体の課題であると考えている。そういう中で、ある程度数字をはじいて原材料や人件費はいくらかなどは、生徒には言わない限り分からないと思う。プロフェッショナルの事業だからこそ経営面を教えることは必要だと思う。

山下委員

ビジネス業界や経済業界、我々も含めて正直模索している段階である。我々大人より子供たちの方が、順応力があると思っている。コロナ禍で社会が変化したことは、デジタル化とオンライン化は当然として、今こそICT教育を取り入れていかなければならない時期にきている。今こそ、どうやって密にならずにオンライン化したり情報をデジタルで発信したりといったアイデアを共有する機会があればよいと思う。また、2030年というキーワードについて

興味・関心を持っている。2030年は、実はもうすぐそこまできている。僕自身は去年考えていた2030年と、今考える2030年とはちょっと変わったような気がしている。オンライン化やデジタル化は、もう少し遅れると思っていたが、スマートフォンなどの普及によりオンライン化が急速に加速している。ここでいう職業観を持った子供たちを10年計画で育成して、その子供たちがこの天草地域に帰ってきてこの地域を活性化させるという大きなコンセプトからすると、それにまず我々が追いつかないといけないという気がしている。是非、先生方が生徒目線の発想で2030年を語ってもらおうと良いと思う。

高崎委員

先ほど各学科の先生方が今年の現状を話されたが、まさにこの研究の社会問題に対してや今までになかった課題解決ということに子供たちが直面していて、逆にとてもいい状況ではないか。普通は仮定の話で進むところが、上手くいかなくてもいいので、今直面していることに対して先生方が「君たちが今試行錯誤し、うまくいかないことにはこういう意味がある、いいチャンスである」と理由付けをしてあげることが大切である。

津留崎委員

コロナ禍で活動をするのは難しいかもしれないが、疑問等をメールや電話、動画を送ってもらってのやりとりをしてみると、実際の現場に行けなくても、何らかのアドバイス等ができると思う。

山下委員

現在、私も経営コンサルをやっている関係で社会変化や未来予想をするときに、政治・経済・社会・技術の4つのキーワードを掲げている。この4つの観点で仮説を立てて、これから農業がどのように展開するのかをアドバイスしている。今回のプロジェクトに関しては、まず技術に関しては「Society 5.0」これが技術の変化で、次に社会の変化だが、世界のトレンドになっているSDGsが関係してくる。一方では、グローバルという社会が変化していく中でGAPという話が出てくると思う。つまりここに出てくるSociety 5.0やSDGs、GAPというのは、4つのキーワードの中の技術と社会の部分に変化することを子供たちに改めて提案すると分かりやすい。経済については、プロジェクトの中では全く触れられていない。過去に講演を行った際、経済の話に生徒たちは身を乗り出して聞いてくれた。もしかすると、大人が思う以上に子供たちはリアルな世界を知りたがっているのかもしれないと感じている。4つのキーワードが2030年にはどうなっているのかを先生たちと運営委員と一緒に考えることで、子供たちにイメージとして繋り、子供たちがそういう未来なら今やっていることは役に立つかもしれないと思ってくれたら、今やっていることがもっと生きるのではないだろうかと思う。

前田委員

子供たちもおそらくリーマンショック以来の就職難に直面すると思う。独立や就職など、選択肢を持たせるためにも、自分達でやれる力を身に付けるヒントを送ってあげることが大事だと思う。コロナ禍で企業も混乱・動揺している

と思う。私の会社も私なりに試行錯誤してこのコロナ禍を乗り越えてきている。そういう苦労話を企業訪問する際に聞かせてもらうことで生徒にも参考になるだろうし、生きる知恵になると思う。お金の話も企業等にお願いし話せる部分で話を聞くことで、ビジネス感覚を身に付けるきっかけになるのではないか。この学校にはいろいろな学科がある。ビジネスにはこれらの全ての要素が不可欠なので、横断的な学科間連携もあると面白いのではではないだろうか。

木之内会長

最後に、地域をどうするかというのがこのプロジェクトの大きな課題の1つではないかと考える。子供達は2030年のこの地域のことについて漠然とは考えているが、おそらく、年齢的に自分の目の前のことで精一杯で、地域や10年後の未来などそんなには考えられないと思う。だから、ある意味では一番大切なことは自分の地域をよく理解して地域の中での可能性を追求する事で自分の目標作りに繋がっていく。そういう意味では2030年に天草がどうなっているかを共通的に検討してみることも大事だと感じた。その中で、自分をこの地域で生かすためにはどうしたらよいかを考えるきっかけになると思う。そういうことを高校時代に考えたことで、いつどの段階で古里に帰って仕事しようと思うかは、きっかけなんて分からないと思う。是非そんな部分を共通的な部分としてディスカッションする部分があったら認識できるのではないかと感じた。そうすることで先生方も勉強になると思う。先生方は全県を動いているので天草出身でない限りそんなに強い認識は持っていないと思う。地域で頑張っている方々と連携する中で、そういった意識付けをさせる事が大事だと感じた。もう一つはSNS（リモート）をうまく利用することで、見学が駄目だったところでもリモートで質問するなどしたらどうか。コロナ禍では何でも出来るわけではないので、今というものをどう受け入れて、今やれることは何かということを生徒とやりとりしながら、出来ることを生徒と一緒に創造していくことが大事である。素晴らしい成果を挙げようとするのではなく、それを作り上げていくプロセスをお互いに達成感として持てるような今年のプロジェクトにして欲しい。

(3) 閉会

中村校長挨拶

松坂審議員挨拶

小田原指導主事が閉会を宣言

令和2年度（2020年度）文部科学省
「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（プロフェッショナル型）」
第2回「運営指導委員会」議事録

熊本県立天草拓心高等学校

- 1 主催 熊本県教育委員会（管理機関）
- 2 日時 令和3年（2021年）1月26日（火）
午後1時30分から午後3時10分まで
- 3 場所 熊本県立天草拓心高等学校 本渡校舎 校長室
- 4 方法 ZOOMによるWEB会議
- 5 出席者
 - (1) 運営指導委員（6名）

| | | |
|------------------|---------|--------|
| 有限会社木之内農園 | 取締役会長 | 木之内 均 |
| 国立大学法人熊本大学 | 准教授 | 高崎 文子 |
| 株式会社ココファーム | 品質管理部門長 | 津留崎 恵美 |
| 有限会社マツイアンドパートナーズ | 代表取締役 | 豊田 希 |
| 株式会社農テラス | 代表取締役 | 山下 弘幸 |
| 株式会社吉次園 | 代表取締役 | 前田 正明 |
 - (2) 熊本県教育委員会（2名）

| | | |
|--|------|-------|
| | 審議員 | 松坂 秀男 |
| | 指導主事 | 小田原 健 |
 - (3) 熊本県立天草拓心高等学校（6名）

| | | |
|--|----------|-------|
| | 校長 | 中村 洋介 |
| | 副校長 | 田畑 淳一 |
| | 教頭 | 泉 伸仁 |
| | 研究担当者他3名 | |

6 議事等

(1) 議案

議案第1号 令和2年度文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」研究成果報告

議案第2号 本事業成果から見えてくる3年目に向けた課題

7 会議の概要

(1) 開会

小田原指導主事が開会を宣言した。
管理機関として松坂審議員より挨拶
指定校として中村校長より挨拶

(2) 議事

○議案第1号「令和2年度研究成果報告について」
これより議事進行を木之内会長へ

木之内会長

本年度の研究成果報告について天草拓心高校担当者からお願いする。

藤井研究主査

今年度の取組として、コロナ禍ではあったが、生徒たちが自ら学習する機会を設けたり、充実した協働学習を進めることができた。活動指標の内容として、SNS等を通じて学習発表を実施でき、地域の方のご好意で様々な校外学習に挑戦できた。今年度できなかったこととして、グローバル企業視察や県外の研修が中止。また、SNSでのライブ討論が未実施。コンソーシアムの成果として、専門性を持った委員とのマッチングができた。また、小さなPDCAサイクルを回すことで、より探究的な学習に繋がった。

今年度の課題として、2030年の地域像をコンソーシアム及び生徒たちと一緒に共有し、地域の情報発信をさらに強化していく必要がある。また、学習結果だけでなく、プロセス等も含め生徒の情報発信を進めていきたい。

「天拓プロジェクト」課題研究型学習の実践例として、地元企業の株式会社デンソー様と協働研究を行っている。東海地方の朝日新聞でSDGsの取組として取り上げられ、周囲の反響が非常に良かった。成果については、別紙資料1で説明。

職業観を育成するための取組として、地元企業の視察研修又は広域本部等の協力のもと、スマート農業関連機械の実演会を開催。

◇令和元年度第2回運営指導委員会の指導・助言に対する長期的な改善点

■イノベーション人材を育成する教職員の資質・能力の向上

授業改革に向けた職員研修及び授業評価、学習評価に伴う観点別評価の試行・作成を継続して実施。民間との接触の場を増やし、学校外の社会意識を教育現場へ取り入れた。

■地域の魅力を探求し、アウトプットを積極的にできる能力の向上

SNSを用いて情報発信することができた。可能な限り実施していく。

■観点別評価に仮説を立て、到達目標を明らかにした生徒の変容の捉え方

ルーブリックを基にアンケート評価を実施。観点別に実施したが、仮説を立てて実施することに課題が残った。

◇令和2年度第1回運営指導委員会の指導・助言に対する短期的な改善点

■SNSを活用した研究発表

YouTubeを使用して学習成果発表を実施。討論会やPR活動を含めたコンテンツを持っても面白い。

■プロジェクト学習の目標は、学習を通じて生徒がどのようになるか設定

現在調整中。具体的な数値目標も含めて設定して行く予定。

◇令和2年度第1回運営指導委員会の指導・助言に対する長期的な改善点

■起業家育成のためのビジネスプランの提案

天草宝島起業塾へ参加。ビジネスプラン作成には課題が多かったが、商工会や金融機関と連携してビジネス化に向けた取組を充実化する。

■2030年の社会がどうなっているのか、生徒と教師の感覚を合わせる為

に共通理解した方が良いということで、コンソーシアム委員の方々からも様々な意見をもらっている。後ほど紹介する。

■コーディネーターによるマーケティング理論に沿った学習計画を探究的に進めることができた。

■課題は、自己意識が高まったが主体性が少なかった。

質疑応答

山下委員

自己意識が高まったが主体性が少なかったとあったが、生徒はそれをどれくらい理解しているのか？

藤井研究主任

天草でプロフェッショナルとして活躍したいという生徒は、現時点で少なからずいる。将来的に、天草に戻って起業したいと思う生徒を増やしていきたい。

前田委員

直接関わった地元企業は、生徒が頑張っている姿を肌で感じ取れたと思うが、他の地元企業とも取り組むことで、経営者の良い刺激になり、地域として一体的な取組になる。この取組をもっと沢山の方に知ってもらえる機会を設けることは考えているか？

藤井研究主任

インターンシップも計画していたが出来なかった。ただ、コンソーシアム委員から企業や経営者を紹介していただき新たな研究に繋がった例もあった。生徒が出向いて将来の天草をどうしたいか伝えることが大切だと感じる。次年度に挑戦したい。

木之内会長

生徒と企業との繋がりの中で、採用に結びついた例はあるか？

藤井研究主任

今のところ無い。

豊田委員

ホップやオリーブなど、生徒も地元これだけの宝がある事に驚くと同時に、興味にも繋がる。中学生に発表する機会があれば、天草拓心高校がどういうことをやっている高校なのかを知る良い機会になる。

津留崎委員

HACCPや食品表示に関する法律が非常に厳しくなっているので、そういう部分を学べばもっと良くなる。伝統食は大切にしたいし、海外まで広がるような夢のあるものになったらいい。

木之内会長

来年度に向けてのアドバイスを各委員からお願いしたい。

山下委員

アドバイスとして3つ。1つ目、各研究がSDGsの17項目のどれに該当するかを具体的に示して欲しい。2つ目、生徒の主体性に関わる部分で、プロ

フェッショナルにはスペシャリストとゼネラリストの2つがあるが、どちらの方向に進むのかを生徒自身に意識させながら取り組んで欲しい。3つ目、地域課題解決に向けてビジネス観点（お客様目線）を意識するとよい。

豊田委員

昨年立てた目標と現時点の目標は変わってきていると思うので、改めてこれまでの経過を踏まえた上で具体的な目標設定のやり直しが必要では。

藤井研究主査

コンソーシアム会議のなかで「2030年の地域像について」というテーマで協議し、以下のような意見が出された。

- テーマが大きすぎて漠然としている。今後、天草がどのような未来になっていけばいいかを考えたらどうか。
- 今後の天草は第1次産業だけ頑張ってもダメ。企業や農家と学校がもっと連携を密にとっていく必要がある。
- 広域本部では担い手不足解消に向け、5年間で新規就農者を養成する政策を実施。

また、「この事業が終了する令和4年度以降、地域でどのような協働体制を作っていくのが良いか」というテーマでも協議した。

- これからは課題を見つけてどうするか、やりながら学んでいく時代だ。天草外から学びに来るなど天草で何ができるかが商品になるのでは。
- 天草以外の高校生と繋がって、お互いの地域について意見交換をするなど、新たに地域を再発見することができるのでは。

「将来的に地域外に出ても天草をより魅力ある地域として外の人に発信できる、また天草に外から貢献できるそういう人材を育てることが一番望ましいのでは。」という結論に至った。

前田委員

高校生と言えども、生徒の中に将来拓心高校でやったプロジェクトをきっかけに本当に事業を興すこともあり得るので、そこに特化してもいいと思う。勉強のための勉強ではもったいないし、実務に通ずる部分も加えてあげると、本当の生きた学習になる。

木之内会長

地域との繋がりを意識すること、自分の地域を再発見するといった基礎的な部分については、成果が挙げられている。先が読めない時代だからこそ、生徒たちが多角的視点で考えることは何より大切だ。少し意識して欲しいのは、3年間で少しずつグレードアップしていくことは大事だが、次の新入生に一方的にグレードを上げすぎることが本当に必要なのかということ。来年度、学校と地域が一体となって今後も継続できる仕組みを構築できるよう、さらにブラッシュアップして欲しい。

(4) 閉会

木之内会長が閉会を宣言した。